

ブラウニーの復讐



“Brownie”

(1877)

ブラウニーとは彼女の本名ではない。しかしながら、その地方の人々は昔からずっと彼女のことをそう呼んでいる。一つには、いつも背中にはらけて垂れている美しい栗色の髪が、その量の多さゆえに彼女の体をすっぽり包んで見えるのが原因———というかむしろ、ふざけまわつて手に負えない、いたずら好きな性格が民間の迷信を通して小妖精^{ブラウニー}(1) という名で知られているはずら小鬼^{ホブゴブリン}(2) の性格と非常によく似ているのが原因であった。ブラウニーにはメアリーという姉がいて、こちらの方は物静かで相当な美人である。二人は幼い頃に両親を亡くしており、叔父のウィリアム・デンビーの世話を受けていた。父の遺言に記された条項によれば、彼女たちが一緒に住んでいる農場は、ヨークシャー溪谷⁽³⁾ に広がっている茫洋とした肥沃な土地の真ん中にある居心地のよい白壁の住居だけでなく、いくつかの納屋や離れ屋も含め、メアリーが結婚して彼女自身のものになるまで、この叔父の管理に委託されていた。デンビーは自分を犠牲にしてまで姪っ子が将来金持ちになるのを嬉しそうに静観しているような男ではない。彼は業^{ごう}突^つく張りだった。残忍な性格ではないにせよ、薄情な男である。かわいそうなメアリーの行動をすべて妬^{ねた}ましげな疑いの目で監視すると同時に、自分の行ないはすべて姪っ子の幸せを心から願つてのことだと、周囲の者たちに思わせるべく常日頃から画策していた。とはいえ、これまでのところは自分の監視の結果に満足していたので、近頃は彼の努力も幾分ゆるんでいた。メアリーはすでに十九歳になっていたが、親戚の人を除いて誰にも愛情のそぶりを見せていなかったため、彼女のびくびくした内気な態度を毎日のように見ていた叔父は、さも満足そ

うに両手をすり合わせながら、将来を樂觀的に考えていた。

このようにウィリアム・デンビーは自分のことを抜かりのない男だと思っていたが、実際には思い違いをしたまま空しい期待を抱いていたようである。そうした彼の心の秘密に気づいた最初の人間はメアリーの妹ブラウニーだった。ブラウニーは十七を少し過ぎていたが、知らない人が見たら間違ひなくずっと若いと思っただろう。背丈は非常に低く、姉の肩ほどもないが、体力の方は同じ年齢の大抵の少年よりもまさっていた。農場の近くには流れの速い、さほど広くはないものの、底の深い川が流れており、そこを泳いで渡るのが彼女の毎日の楽しみになっていた。たしかに彼女は全然美人でないし、つぶらな緑がかかった目は、まばたく時に人を不快にさせるほど無気味で恐ろしい光を放ち、凶眼⁽⁴⁾の魔力について語った様々な種類の老婆物語⁽⁵⁾を思い起こさせる。彼女は、幼い子供時代には知らないうちに周囲の人々の嘲笑や驚嘆を招いていたが、成長するにつれて自分の与える印象を意識するようになり、その印象を強めるためにできることは何でもやって、いたずら小僧のように喜んでいるようだった。物覚えが早く、観察力もすごかった。幼い頃から古いバラッドの一節を歌いながら歩きまわるといふ——小妖精のような彼女が有する他の特性ともぴたり合う——癖がついていた。歌が不気味であればあるほど、彼女はその歌が気に入った。田舎の農民たちの何人かを気が狂うほど魂消^{たまげ}させたことも一度か二度はある。こっそり夜中に叔父の仔馬を厩舎から出して乗り、大きな角灯を手に持って野原を駆けめぐり、時おり気味の悪い歌やかん高い笑い声を発していたとい

う。みんなと一緒にいる時は非常に物静かで、実際、どんな場合でも自分の話をするのがほとんどなかったため、多くの者たちが何のためらいもなく彼女のことを「薄ら馬鹿」と呼んでいた。彼女の叔父は彼なりの理由があつて、この呼称をもつと広めたがつていたようだ。ブラウニー自身もその汚名をむしろ気に入つていたが、多分、そのおかげで好き勝手に思う存分ぶざけまわる機会が増えると思つていたのである。彼女の姉もまたみんなと同じように考えていたが、それによつてむしろ不可解で常軌を逸した妹に対する愛情が深まつていた。ブラウニーは、こうした姉の愛情に対する反応を行動で示すことはなかつたものの、どんなに心から感謝しているかは自分ではちゃんと分かつていた。

先ほど述べたように農場主デンビーの土地は広大なものだったが、隣の農場主ドリユーのそれはさらに広範囲にわたつていた。一つにはそのせいで、一つにはこの隣人に起こされた訴訟に負けたことがあつたせいで、ブラウニーの叔父は相手を蛇蝎だかつのごとく嫌い、彼のように邪悪な性質の男しか持てないような恐ろしい感情を抱いていた。デンビーが家族の者たち全員に隣の農場の人間すべてとの交際を禁じたのはかなり昔のことである。この禁止令は見たところ厳密に守られていたようだが、神のおぼし召しによる痛烈な皮肉によつて、二つの家族は最強の絆によつて結び付けられることになつた。

メアリー・デンビーは美声の持ち主として田舎の至るところで知られており、毎週日曜日に村の教会で聖歌隊を率いている姿がよく見られた。農場主ドリユーの長男フィリップが、そ

の控え目な美声の少女に初めて強い感情を抱いたのは、この教会だったに違いない。そのような感情をいったん抱いてしまったら最後、どんな横暴な禁止令をもつても、彼がメアリーに会って自分の愛を優しく男らしい言葉で告白しようとするのを妨げることはできない。ちょうど今は干し草作りの季節だったので、二人が毎日それぞれの家の農場のはずれで数分の逢瀬おうせの機会を見つけるのは簡単だった。ブラウニーが姉の秘密を知ってしまったのは、そうした折のことである。

ブラウニーが茂った生垣の陰に座って物思いにふけていると、彼女の敏感な小耳が生垣の反対側から聞こえるささやき声をとらえただけでなく、そのあとすぐ彼女の小さな鋭い目がフリリップと真剣に話している姉メアリーの姿をとらえた。集中して耳を傾けていたところ、ついに恋人たちが互いに抱き合って唇を重ねるのが見えた。それで、日焼けした頬がサツと青ざめたブラウニーは、とっさに姉の名前を口に出して立ち上がった。

二人の恋人たちはブラウニーの声を聞いて仰天し、それぞれ声がした方角に顔を向けた。ブラウニーは二人から姿を見られなかったので、前よりも大きな声で姉の名前を繰り返して呼んだ。

「ブラウニー、あなたなの？」と、メアリーが震える声で生垣の中を通して尋ねてきた。

「そうよ、姉さん。他の人の目もあるってこと、忘れないでね。ああ、お願いだから、私なんかに邪魔させないで！ ちょっと警告したかっただけだから。じゃ、またね！」

それからブラウニーは干し草畑の方へ走って行った。かん高い声で、次のように大好きな詩の一節を口ずさみながら――

ああ 川は冷たし 乙女が眠る

川底は暗く 深くて 石のように堅し

大きな青い目で上流を見つめる

彼女を太陽が目覚めさせることはなし

ブラウニーが姉のために監視を始めたのはその日からである。薄ら馬鹿という仮面の下に隠れている卓越した鋭敏な観察力のおかげで、彼女はメアリーの行動を密かに探る叔父のやり方にも嫌いだという気持ちでいた。この男にブラウニーがなつたことは今まで一度もなく、いかにも嫌いだという気持ちで隠そうともしなかつたので、デンビーの方も大きな利息をつけて応酬してきた。しかし、この貪欲で心の狭い農場主は、迷信の恐ろしさもよく知っていたので、ブラウニーに漂う何か未恐ろしいものを感じ取って、いつも彼女のことをできるだけ避けていた。すべての悪党に共通することだが、彼は彼女のつぶらな縁がかつた目によって魂の中まで見抜かれ、自分の心の秘密をことごとく読まれているのではないかと思わずにいられなかつた。一方、ブラウニーはどうかと言えば、叔父が自分の凝視に尻込みしたり、（彼女が時お

り気づかれぬように近づいて急に突拍子もないことを話した時など）恐怖のあまりギクツとするのを見て、意地悪にも面白がつているようだった。叔父が姉を付けまわすなら、自分もまた彼を尾行してやろうと決めていたのである。このように、デンビーはブラウニーが遠く離れたところにいるとばかり思っていたのに、すぐ近くで自分を見ていたことに気づき、恐怖におののくことが頻繁にあつた。

* * * * *

恋人たちが相思相愛になるにつれ、こっそり隠れて逢瀬を楽しむのに注意が払われなくなるのは仕方ないが、そのためにメアリーはどうとう二人でいるところを叔父に見つかり、秘密も知られてしまった。しかし、二人は叔父から監視されていることを知らなかったし、知られないようにすることが叔父の目的でもあつた。秘密の隠れ場から二人をこっそり観察していた叔父は、彼らの口からもれる——子供じみてはいるが——心からの愛の告白にしばらく耳を傾け、永遠の忠誠を誓う言葉を聞くと、苦々しい憎しみと復讐の願望を胸に秘めて立ち去つた。だが、彼は立ち去る際に、目の前にブラウニーが立っているのに気づいた。彼女はしばらく彼の目を見つめていたが、何か変なところに気づいたという様子を見せるでもなく、妖精のような彼女特有の動きでくると片足で回転し、歌いながら走り去つて行った。家路を急ぐデン

ビーの表情はだんだん険しくなったが、農場内の居室の門に着く頃には人当たりのよい顔になっていた。彼はよいよ決意を固めたようであった。

「メアリー、お前には」と、前記の場面に遭遇してから二週間ほどして、農場主デンビーは姪っ子に言った。「B——町の弁護士のところまで伝言を頼みたいんだが・・・他の者には任せたくないし、歩いて行けば元気が出ること間違いなしだから、どうかね？ 急ぐ必要はない。月はあまり出でないけど、このところ夜も快適だよ。三十分ほどだが、暗がりの中を歩くのは怖いかい？」

そう質問されてメアリーはほほえんだが、同時に少し驚いてしまった。もう午後の遅い時間だったし、歩いて行けば全部で少なくとも六マイルはある。さらに、そうした大切な頼み事を任されるのは珍しいことだったのである。

「お前の妹にも一緒に行ってほしいんだが」と叔父は付け加えて言った。「ちようど今、酪農場で叔母さんの用事があるんだ。ひとりで行って構わんかね？」

「ええ、全然平気よ、叔父さん」と、メアリーは明るく答えてから、出かける準備を始めた。実を言うと、叔父の願いを聞き入れる他にも、彼女には喜んで出かける理由があった。自分が歩く道は恋人の家の前を通っていたのである。デンビーもそのことは十分に承知しており、メアリーに伝言を手渡す際にも心に留めていた。メアリーは上機嫌で出発し、元氣よく夜道を歩いて行き、やがて農場の視界からも消えてしまった。

案の定、メアリーは途中でフィリップと出会った。彼はしばらく付き添ってくれたが、別れなければならなくなると、帰りも待つてやると約束してくれた。彼女はルンルン気分では先を急ぎ、それから帰途に就くまでは一瞬一瞬が一時間にも思えた。弁護士に会えるまでしばらく待たされたため、帰る時にはほとんど暗闇に包まれていた。待つことに業を煮やしたフィリップは少し歩いて彼女を迎えに来ていた。だが、二人ともやっと再会したあとは、これ以上時間をかけることができないほど、ゆっくりと農場へ戻って行った。二人は夜であることを完全に忘れており、実際、暗闇の中だから誰にも姿を見られずに安全だという感覚しかなかった。やがて遠く離れた村の教会の時刻を告げる鐘の音が静かな畑を通して鳴り響いてきた。メアリーはハツとして家路を急がないといけないと言った。フィリップはもつと先まで送らせてほしいと許可を求めたが、それは駄目だった。叔父自身ではないにせよ、彼女を迎えに派遣された使いの者に出くわすかもしれない。メアリーはそのことを恐れていた。それで、恋人たちは互いに愛情を込めた別れの言葉を交わし、メアリーの方はひとりで帰路を急いだ。

しかしながら、空に月は見えず、夜の闇がどんどん濃くなっている。道からはずれ、踏み越し段⁽⁶⁾を越え、牧草地に入つて急いでいると、うっとりするような静寂に包まれ、馥郁^{ふよく}たる香りが地面から立ち昇り、雲におおわれた空のあちこちにキラキラ輝くものが次第に姿を見せ始めたので、彼女は何とも言えない喜びで胸がいっぱいになるのを感じた。フィリップと別れた直後に感じた悲しみも今では消え失せ、自分自身の明るい未来ばかり考えていた。彼が最後に

発した言葉は、すべてを包み隠さず自分の父親に話し、二人の農場主の間に存在する執念深い敵対心に打ち勝つために最善を尽くすというものだった。その時は、地上に降りたつた美しい穏やかな愛の妖精が、すべてはうまく行くと予言しているように思えた。だが、ああ、悲しいかな！ 我々の期待はいつも予言どおりに行くとは限らないのだ。

農場に着く前に横切らねばならない最後の牧草地の奥まったところに川が流れていた。メアリーは小道を歩いてしたが、その川を渡る橋まで行くには——短い距離だが——川岸に沿って歩く必要があった。ちょうどこの辺りは土手が急で険しく、川底も非常に深くなっている。この小道をはさんで川岸とは反対側に鬱蒼と茂ったハシバミとヤナギの並木があり、それは百ヤードほど下流でかなり大きな森になっていた。今しがた少し前方にある低木の茂みが急にカサカサと鳴ったみたいだが、あれは風のせいだったのだろうか？ いや、カサカサという音が聞こえただけではない。それほど暗くはないので、低木の枝がかすかに揺れるのが見える。不思議だ！ 彼女は急ぎ足を少し速めたが、心臓の鼓動もほんの少し速まった。やっと橋から数ヤードのところまで来た。低木の茂みはより川岸に接近し、そこは狭い小道の余地しか残っておらず、しかも茂みの陰で暗くなっている。橋のアーチがはつきり見えて元気が出た丁度そのとき、彼女はがっしりした腕に突然つかまれるのを感じた。と同時に、彼女は川岸から深い、暗い、静かな川の中へ乱暴に投げ込まれてしまった。そして、夜の闇をつんざくように悲鳴を発したあと、彼女は川底に沈んでしまった。

シツ、静かに！ あれは人の悲鳴が反響しているだけか？ 水しぶきが反響する音じゃないのか？ ウィリアム・デンビーは成り行きを見守ったりすることなく、競走馬のようなスピードで橋まで突っ走り、橋を渡って農場にたどり着いた。それから雇い人たちに大声で繰り返して叫んだ。

「助けてくれ！ 助けてくれ！ 川の方から人の悲鳴が聞こえたぞ！ 誰か川に落ちたんだ！ お前たち、助けてくれ！ 誰か溺れてるぞ！ ああ、メアリーでなけりゃ！ 助けてくれ！」

彼は川に向かって走りだした。それはまったく違った方向だったが、彼のすぐあとを雇い人たちが続いた。人の叫び声が繰り返して二度みんなの耳に聞こえた。どうやら二人の女性の声のようだ。それから水を打ったように静まり返った。農場の労働者たちは恐怖で気も狂わんばかり、心の落ち着きを保つのはほとんど不可能のように思えた。彼らは自分の耳を信じることもなく、雇い主のあとに続いて導かれるままに進んで行ったが、そちらは叫び声が聞こえた場所から遠く離れた方向だった。数分もしないうちに、女たちが角灯やにわか作りの松明たいまつを手にとって、急ぎ足で牧草地を横切ってきた。搜索は川の両岸に沿って迅速に繰り返された。ほとんどなく、多くの人々が集まっているように見える橋の下あたりの地点から、大きな叫び声があった。全員そちらに急いで行ったが、灯りに照らされた光景を見ると、すぐさま二足三足たじろいだ。川の牧草地側では土手が岸に向かってゆるやかに傾斜しており、その小石の上に

二人の若い女性が寝かせていた——ブラウニーと彼女の姉メアリーだ。

二人は大急ぎで農場へ運ばれ、田舎者たちが過去の経験から工夫できる治療はすべて実行に移された。その一方で使いの者たちもよりの医者呼びにやられた。しかし、彼らが戻ってくる前に、ブラウニーはまだ生きている兆候を見せ始め、すぐさま起き上がるとけろりとしていた。メアリーの場合はそうはいかなかった。農場の者たちはあきらめずに彼女を生き返らせようとしたが、女たちはまもなく目に涙を浮かべ、男たちは憂慮の色を浮かべた顔を横に振り、互いに見つめ合っていた。ほどなく医者がやって来たが、ちよつと診察してから手遅れだと言った。メアリーは死んでいたのである。

ブラウニーは静かに立って姉の死体を見ていた——他の者たちがその場をあとにして泣き崩れたり、この悲しい事件について話し合ったりしたあともずつと。どんな質問を投げかけられても彼女は黙り込んで反応しなかったし、どんなに強い口調で問い正しても彼女からは一言も聞き出せなかった。今では、みんなが彼女のことを放っておくようになり、「あいつは恐怖のせいで完全なアホになつちまつた」とか、「かわいそうに、これからブラウニーは一層ひどくなるぞ」とか、互いに言い合っていた。これまでも服を脱いだ姿が目撃されていたが、今では水がしたたる下着だけで立っている姿を目にすることがある。事件の時は、彼女がすぐに息を吹き返したので、しばらくの間みんなの注意は彼女の方だけに向いていた。これまでブラウニーはその異常なほど長い髪の毛をいつも縛らずにたらしっていたが、今では水でぐつしより

濡れた長い髪が彼女を包むように垂れ下がっていたため、さながら体の一部しか服をまとっていない川の精(ニンフ)のようには見えた。その顔と華奢な腕(きさしや)はまるで大理石の彫刻のようである。呼吸もほとんどしているようには思えず、つづらな緑がかつた目からは鋭い眼光が射るように放たれていた。それは暗闇の中にいるネコの眼光に似ていた。

彼女に口をきかせることができるようになったのは、それからかなり経つてのことである。しかし、とうとう口を開いた時も、姉さんに会えると思つて暗闇の中を——日頃からよくしていたように——川岸に沿つてぶらぶら歩いていると、向こうから姉さんがやって来て、草の上でツルリと滑つて土手から川に落ちるのが見えたと言っただけだった。それでブラウニーは悲鳴をあげ、姉のあとを追つて川に飛び込んだのだ。それだけだった。真つ先に彼女に質問する人たちの中に叔父のデンビーがいた。彼女は答える時に叔父の顔を鋭い眼光でじつと見ていたので、彼の背後に立つていた人たちは、理由は分からなかったものの、彼が何歩か尻込みするのを感じたそうである。

メアリーが埋葬されてから、ブラウニーは数日ほど黙り込み、さ迷い歩いていった。彼女は口がきけなくなつたと言う者もいた。彼女から何か言葉を引き出そうとしたが、できなかつたからだ。姉の死後は涙を流すこともなかつた。つい最近までは太陽にさらされて焦げ茶色になっていた彼女の頬は急に青白くなり、それと分かるほど日増しにこけていった。彼女には一日の大半を過ごす大好きな場所が一つあった。それは農場のはずれにある茂った生垣の陰である。

なぜそこに行くのか、その理由を知っているのは彼女だけであつた。

ある日のこと、農場の労働者の一人がたまたまブラウニーの前を通つたとき、彼女はひざの上に肘をつき、両手で顔を支えて座っていたが、その小さな体は褐色の長い髪でほとんどすっぽり包まれていた。男はひとりぼっちで哀れな彼女に同情し、優しい言葉をかけてやつた。すると、すぐに彼女はパツと立ち上がり、しばらく彼の顔を鋭い目つきでのぞき込んでから、いきなり例の古い詩の一節を歌いだした――

ああ 川は冷たし 乙女が眠る

川底は暗く 深くて 石のように堅し

大きな青い目で上流を見つめる

彼女を太陽が目覚めさせることはなし

男はブラウニーの狂気じみた異様な顔つきと声に震えながら立ち去り、「あいつはまた声が出るようになったぞ」と触れまわつた。やがてみんなもそのことに気づくようになった。というのも、その日からブラウニーは例の詩を歌いながら、たえず農場をさ迷うようになったからである。彼女を叱りつけて、「姉さんのことを考えろ」と言う人たちもいたが、返ってくるのは絹を裂くような笑い声と、あとで何時間も苦しめられることになる薄気味悪い視線だけだつ

た。首を横に振って由々しき言葉——できれば口に出したくないような言葉⁽⁸⁾——を互いにつぶやく人たちさえた。

しかし、もつとも不可解だったのは、ブラウニーが突如として叔父のことを好きになったように見えたことである。叔父が行く場所はどこでも彼女はついて行った。彼がどこに座ろうが、彼女は必ずその反対側に腰かけ、決して彼の顔から視線をそらさなかった。時には、デンビーが今から食事を始めようとして顔を上げるとブラウニーと目が合い、その視線に我慢できず顔面蒼白になって立ち上がり、「急に気分が悪くなったので食事はやめた」と言うことがよくあった。そんなことがあると、必ずブラウニーも立ち上がり、あの川の詩を歌って、それから「叔父さんのことを好きになるわ」と言いながら彼の手を取り、ついて来させたものである。詩のすべての断片の中で、今の彼女の記憶に残っていたのは例の川の一節だけとなり、農場の人たちは真夜中に何度も彼女の歌声で起こされ、それが家中に響き渡るのを聞いて、恐怖のあまり思わずゾツとしたものである。

* * * * *

メアリーの死から一年近く経過した頃、ブラウニーが毎日数時間ほど姿を消すようになった。彼女に何が起こったのか誰も知らなかったが、気にかける者もいなかった。これまでも神

出鬼没だった彼女の動向は説明できなかったからである。おそらく最初に気づいたのは彼女の叔父だろう。彼にとつて姪っ子の不在はかなり気の休まる時であった。しかし、ブラウニーがやせて青白い顔になったとはいえ、彼の方がさらに一層やせて青白くなっていた。一年前に比べるると見る影もなく変わりはててしまっていた。ここ何ヶ月の間、狩りたてられた獣のような生活を送り、狩りたてる者から逃れようとしても、もつとも予期していない時にいつも捕らえられたのである。とても神経質になつてしまい、ほんの小さな音がしても木の葉のようにぶるぶる小刻みに震え、ブラウニーの眼差しと声に対しては体が麻痺して動かなくなるようだった。このところ二週間近く、彼は精神的な拷問を受ける相手から逃れることができていたが、この執行猶予は（そんなことがありえるなら）実際の拷問よりも恐ろしかった——その先に何があるのか判然としないのだから。

とうとうメアリーの一周忌がめぐつてきた。デンビー自身は忘れてしまつているみたいだったが、他の者たちはみんな憶えており、あの出来事の記憶を呼び起こしながら、互いにひそひそ話していた。一周忌の今日ほどブラウニーが静かにしている日はこれまでになかった。彼女が話しているのを聞いた者は誰もいないし、今日はずっと彼女の歌も休止状態だった。「あの子は今日が何の日か知つてんだな。姉ちゃんのことを考えてんだよ」と、みんなが互いに言っていたものの、そのことを大っぴらに彼女に対して言う者は一人もいなかった。たまたま今日はデンビーがB——町に用事のある日で、彼は午後遅くなつてから歩いて出発した。畑を越え

て行く時に四方八方を熱心に、心配そうに見渡しながらブラウニーの姿を探したが、どこにも見当たらない。この時だけは彼もホッと胸をなでおろした。

ドリユー農場の人たちは、その日もすでに暗くなつてから、ブラウニーがフィリップとの面会を求めて不意にやつて来たので驚いた。姉の恋人だったフィリップは彼女と面会し、「メアリー」というたつた一言の説明だけで彼女の要求に従い、なすがままに連れて行かれた。彼はみんなと同じように哀れなブラウニーのことを「薄ら馬鹿」と思っていたが、彼女の姉に対するかつての愛ゆえに優しくふるまい、彼女の気まぐれに喜んで調子を合わせてやった。それで、二人は黙つたまま手をつないで歩き、畑を抜けて川の方に進んで行つた。非常に暗い夜で、聞こえる音と言えば、農場主の住宅で飼われている犬たちの遠吠えの声だけである。ハシバミとヤナギの木立のそばにある橋まで川岸に沿つて続けている小道に着くと、ブラウニーは立ち止り、さほど離れていない森の方角を指さした。そこで光が赤々と輝いているのがフィリップには見えたが、その光はどこから来ているのか見分けがつかなかった。

「あれは何だ？」と彼は尋ねた。「行つてみよう」

しかし、ブラウニーは彼を押しとどめ、何も言わずに小道と接している低木の茂みの中へと引きずり込んだ。それから小声で彼に言った。

「農場主のデンビーが橋の方にやつて来るまで、ここにじつとしていて。あの人を監視して、光の方に向かって行つたら、こっそり後を追うのよ」

次の瞬間、彼は隠れた場所ですりになっていった。最初はブラウニーから言われたとおりにすべきかどうか少し迷ったものの、今日が何の日か思い出すと——彼女の真剣な口調と今から尾行しようとしているのがデンビーであることを考えると——ありとあらゆる種類の奇妙な考えが頭に浮かんだが、彼は彼女の命令に従うことに決めた。

隠れてしばらくすると、さつさと歩く重量感のある足音が近づいてくるのが聞こえた。その足音は死のごとき静寂の中ではつきり聞き取れた。すると、突然、森の中から絹を裂くような悲鳴が聞こえてきた。それと同時に足音がやんだので、フィリップが茂みから目をこらしていると、さほど遠くないところで背の高い黒ずんだ人影が悲鳴の聞こえた方を向いているのが見えた。農場主のデンビーだ！ 次の瞬間、また悲鳴があがったので、農場主は木々の間で輝いているのはつきりと見える光の方へサツと動きだした。フィリップは至近距離でできるだけ素早く彼の後を追った。光に近づいてみて、ようやくフィリップにはそれが一本の木の枝からぶら下げられた大きな角灯だと分かった。近くに立っていたデンビーは微動だにせず、目の前にあるものをじっと見つめている。農場主は何を凝視しているのだろうか？ フィリップが彼のすぐ背後まで抜き足差し足で近づくと、それが何であるか判明した。

大きな木の幹の根もとから樹皮が全部はぎ取られ、その跡に文字が深く刻み込まれ、よくある黒いペンキで塗られていた。この文字は枝から下がった角灯の光ではつきりと見える。フィリップはデンビーの背後に立ったまま読み上げた。

一年前、お前は私を殺した

今晚、私は復讐を要求する

メアリー

フィリップの血は恐怖で凍らんばかりとなり、しばらく動くことができなかつた。彼は前に進み出て、デンビーの肩に手をずしりと置いた。相手の男は突然ハツとして振り返り、狂つたような血走つた目でフィリップの顔をじつと見つめていた。それから彼は荒々しく手を払いのけ、サツと立ち去つた。フィリップは大声で助けを求めながら彼の後を追いかけた。デンビーはいったん森から出ると、脱兎のごとく小道を走り、橋の方に向かつた。ちょうどそのとき、かすかな光を放つ月が雲間に現れて小道を照らしたので、道をふさいでいるブラウニーの姿が見えた。

ブラウニーは目をメラメラと燃え上がらせ、デンビーの進路を阻むかのように、むき出しの白い両腕を広げていた。叔父は彼女の姿を見ると恐ろしい悲鳴をあげ、両手で顔をおおい、そのまま狂つたように川に飛び込んだ。川の水面が彼を閉じ込めてしまうと、狂気じみた歌声が響いていた――

ああ 川は冷たし 人殺しが眠る
川底は暗く 深くて 石のように堅し
大きな血走った目で上流を見つめる
やつを太陽が目覚めさせることはなし

【訳注】

- (1) スコットランドの迷信に出てくる家につく小妖精 (Brownie)。イングランドでは「妖精ロビン (Robin Goodfellow)」と呼ばれ、夜間に現れて家人に代わって細々した仕事をやってくれる。褐色か黄褐色をしており、農場を好んで住みかとする。
- (2) いたずら好きで、お茶目な醜い妖精 (hobgoblin ≡ Robgoblin = goblin Robin)。特にシェイクスピアの『真夏の夜の夢』に登場する妖精パックが有名。
- (3) イングランドのノース・ヨークシャー州からカンブリア州にかけての深い谷 (Yorkshire Dales)。
- (4) その目でにらむだけで他人に害を与えたり、不幸をもたらしたりするとされる邪悪な目 (evil eye)。
- (5) 盲信しやすい老婆によって言い伝えられ、広められる類の迷信じみた作り話 (old wives' tales)。
- (6) 牧場に設けた階段状の垣根、壁、塀などで、人間は越えられるが、牛や羊は越えられないような設計になっている。伝統的に踏み越し段は若い男女の逢い引きの場所として利用される。例えば風景画では、クレジック (Thomas Creswick, 1811-69) の『踏み越し段』 (The Stile, 1839) やトムソン (Jacob Thompson, 1806-79) の『真の愛の道は険し』 (The Course of True Love Never Did Run Smooth, 1854)。
- (7) ギリシャ・ローマ神話では山、森、木立、泉、川などの自然に住む精霊 (nymph) で、美しい乙女の姿をし、人間にも好意的である。
- (8) 「地獄に落ちろー! (God damn her!)」の類。